

江戸城大奥「祈祷所」の機能と性格

江戸法養寺の事例を中心に

望 月 真 澄

はじめに

近世後期の仏教は、葬祭から祈祷に移行していったといわれているが、^{〔1〕}仏教各宗派においても祈祷を行なう祈祷寺院が各地に誕生している。現世利益のニーズもあつてか、これらの寺院は、武家社会において大名・旗本といった支配層から帰依をうけ、その菩提寺や祈願寺としての地位を確立していった。將軍家においても、江戸御府内にゆかりの寺院が建立され、將軍家の安泰を祈って祈祷を行なう將軍家「祈願所」と称する寺院が存在した。一方、江戸城大奥に仕える御殿女中^{〔3〕}といわれる女性も、將軍家や御台所の安泰を祈り、將軍家ゆかりの寺院に祈願を依頼していた。彼女たちの職制は、上臈年寄から御末に至るまでそれぞれの職務があり、^{〔2〕}寺院で行なわれる開帳や縁日に將軍や御台所に代わって参詣し、祖師や守護神といった靈験ある神仏を勧請する寺院に現世利益の祈願を行なっていたことが明らかになっている。^{〔3〕}すなわち、この將軍家「祈願所」とは別に、大奥女性が祈願を依頼する寺院も存在したので

江戸城大奥「祈祷所」の機能と性格（望月）

ある。これは、通称、江戸城大奥「祈禱所」と呼ばれ、祈願といった儀礼を通じて相互の関係を深めていく。しかし、江戸城大奥「祈禱所」の機能と性格に関する研究は、管見する限り皆無に等しい。そこで、「祈禱所」の性格や大奥女性との信仰的なつながりを考察することによって、祈禱寺院の性格や將軍家における祈願の特質が窺われると思われる。

本稿は、江戸城大奥「祈禱所」として君臨した寺院の中でも、江戸下谷にあった日蓮宗法養寺の事例を中心に検討してみたい。具体的には「祈禱所」としての役割について、法養寺に格護されている江戸城大奥関係史料によって分析を試み、当時の大奥女性の信仰面や日蓮宗寺院としての宗派的特徴を探る手掛かりをつかんでいきたい。

一 江戸の日蓮宗寺院と江戸城大奥

天下を統一した徳川家康の江戸入府にともない、御府内には新たな寺院が建立され、対象とする日蓮宗の寺院も、主に家康から三代家光の頃までに寺院が建立されていく。当時の江戸近郊に存在する日蓮宗寺院の中で、將軍家ゆかりの寺院や「將軍家祈願所」といった寺院が多く存在するのである。そこで、江戸城大奥や徳川御三家・御三卿の大奥とゆかりのある日蓮宗寺院について、両者のつながりについて考えると、次の四つに区別できる。

- ① 大奥女性が開基檀越になっているもの
- ② 大奥女性の帰依により、堂宇・仏像・靈寶等が寄進されているもの
- ③ 大奥女性が祈願を依頼し、代参しているもの
- ④ 大奥の祈願所となっているもの

この中でも祈願所と称される寺院はそれぞれ將軍家や徳川御三家とのつながりや由緒を持つが、それをあげてみると、次の表1のようになる。

表1 日蓮宗祈願所寺院一覽

| 寺院名 | 祈願所の性格 | 祈願所となった年代 |
|-----------|--------------|------------|
| ① 高田亮朝院 | 將軍家永々祈願所 | 明暦元年（一六五五） |
| ② 中山法華經寺 | 將軍家祈禱所 | 天保三年（一八三二） |
| ③ 中山智泉院 | 將軍家御祈禱御法要取扱所 | 天保三年（一八三二） |
| ④ 日暮里延命院 | 水戸徳川家祈願所 | 貞享年中 |
| ⑤ 千駄ヶ谷仙寿院 | 紀州徳川家祈願所 | 正保元年（一六五五） |

この他にも、祈願所となった日蓮宗寺院として、大久保妙典寺、関口蓮光寺、日暮里延命院、足立国土安穩寺、水戸家祈願所として西片興善寺等があげられる。¹⁰これらの寺院の祈願所となった時期は判明しないが、表に掲げた五つの寺院に関しては、武家というよりもむしろ奥向きの大奥女性と密接なつながりがある寺院ばかりである。その中でも、水戸徳川家の祈願所であった④延命院、紀伊徳川家の祈願所であった⑤仙寿院は、水戸家の祖である頼房や紀州家の祖である頼宣を生んだ、家康側室養珠院お方の方からその端を発するわけである。また、將軍家の祈願所であった①亮朝院は四代將軍家綱代、③智泉院は十一代將軍家斉代であったが、それぞれ当時の大奥女性の信仰と関連して

江戸城大奥「祈禱所」の機能と性格（望月）

江戸城大奥「祈禱所」の機能と性格（望月）

いる。すなわち、家光代に側室桂昌院お玉の方、家綱代に正室顯子、そして家斉代に側室お美代の方といった熱心な法華信者がそれぞれ大奥内にいたからであろう。

また、これらの寺院の中で靈験ある勸請仏は、亮朝院・延命院・仙寿院が七面大明神、法華経寺・智泉院が鬼子母神とそれぞれ守護神を勸請している寺院であった。その内、亮朝院が七面大明神を本尊とする「身延積善坊流祈禱」、智泉院が鬼子母神を本尊とする「中山智泉院流祈禱」、そして延命院が七面大明神を本尊とする「延命院祈禱」と、それぞれの修法祈禱でならした寺院であり、それぞれの守護神の靈験と独自の加持祈禱で御殿女中の帰依をうけていたことが特徴といえる。⁽¹¹⁾

こうした江戸の日蓮宗寺院と大奥女性の関係を念頭におき、以下、法養寺と江戸城大奥とのつながりをみてみることにしよう。

二 江戸城大奥「祈禱所」の成立

江戸時代の法養寺は、「浅草薬店法養寺」と呼ばれ、江戸庶民にその存在が知られていた。⁽¹²⁾そこで、法養寺と江戸城大奥との関連を考察するため、法養寺の概観についてみてみたい。⁽¹³⁾次の史料は、弘化四年（一八四七）、法養寺が寺社奉行所に提出した諸堂勸化の願書である。

乍恐以書附奉願上候

一 拙寺開基者池上本門寺十二代目日惺於 御府内ニ説法弘通之地拝領仕度旨、東照宮様江奉願上候処、御聞濟被為 在、御入国之砌千五百坪余法養寺拝領地ニ御座候、右ニ付本門寺勸弘所と相称申候、御祈禱堂之儀者、

御代々様尊牌並鬼子母神大黒天熊谷稻荷御同社安置二御座候、右鬼子母神大黒天尊像者、有徳院様御感得被為、在候尊像二而、享保十八未年五月御納二相成、別而鬼子母神尊像之儀者、御惣躰奠金御紋散シ、御厨子茂御紋附二御座候、此尊像惇信院様御疱瘡之御御祈禱被、仰付候節、御祈禱本尊二御納御座候儀二付、右御吉例を以当公方様御疱瘡被為、在候叵茂御祈禱奉申上、御巻数御洗米西御丸大奥江献上仕、猶又当右大將様御疱瘡被為、在候節茂御吉例ヲ以御祈禱奉申上、御巻数御洗米西御丸大奥江献上仕候、又三十番神尊躰之儀者、高厳院様御造立二而、寛文年中土蔵造之御堂其外葵御紋附赤地金欄之御水引共御建立御寄附二御座候、尤土蔵造之御堂者明和九辰年類焼仕候、勿論其御類焼御届之節之絵図面等御座候、並葵、御紋附水引者無御別条相殘、御祈禱堂御同社ニ安置仕候、且又客殿安置之日蓮大菩薩御木像茂、高厳院様御造営二御座候、御祈禱堂葵御紋附御水引並御戸張者、享保十八年二月浄岸院様御寄附二御座候、安永二年葵御紋附物御改御座候砌、(中略)往古両御丸大奥御祈禱所二而、毎年正五九月二月初午九月祭礼十月祖師会式中甲子、右之通例年不易御祈禱御巻数御洗米御札御供物等両、御丸大奥江献上仕候、且又於御祈禱堂ニ天下泰平御武運御長久御繁栄之御祈禱仕候、右等之詔を以、將軍宣下並若君様御誕生之御祝儀之節、松之間ニおいて拝見御目見被、仰付、御中入之節御料理頂戴仕候儀、元文二年亦去ル文化十四年西、御丸ニおいて、御廉中様御懐胎被為、在候叵茂御祈禱被仰付、同十月御安産被為、在候、竹千代君様御誕生ニ付御肥立之御祈禱又々被、仰付、右両度共抽丹精御祈禱奉申上御巻数御洗米西御丸大奥江献上仕候、右申上候通之御由緒御座候、(中略)御武運御長久御繁栄之御祈禱精々可奉動上冥加至極難有仕合ニ奉存候、乍恐此段御聞濟被成下、願之通被、仰付被下置候様、偏ニ奉願上候、以上

これは祈祷殿・客殿その他の勸化の許可を得ることが主眼であるため、法養寺の故事来歴と將軍家・大奥とのつながりが詳細に記されている。内容を整理すると、法養寺は池上本門寺十二世日愷が説法弘通の折に、徳川家康より千五百余坪を拝領し、本寺である本門寺の「勸弘所」と称されている寺院であるということが主な内容である。さらに、これを將軍家とのつながりからまとめてみると、次のようである。

- ① 寺内に梁間三間桁行四間の祈祷堂があり、歴代將軍の尊牌、鬼子母神・大黒天、熊谷稻荷を堂内に勧請している。
 - ② 將軍宣下や若君誕生の御祝儀の節に、松之間において拝見御目見を行なっている。
 - ③ 鬼子母神・大黒天の仏像は、有徳院（八代將軍吉宗）が感得し、享保十八年（一七三三）五月に寄進したもので、鬼子母神像や厨子には葵紋が付されている。
 - ④ 三十番神堂は、高厳院（正室顯子）が寛文年中に造立し、葵紋附赤地金欄の水引を寄進している。
 - ⑤ 高厳院は、祈祷堂や客殿の日蓮像を造営している。
 - ⑥ 浄岸院（島津繼豊室・竹姫）は、享保十八年（一七三三）に祈祷堂の葵紋附水引・戸張を寄進している。
- すなわち、將軍とは八代將軍吉宗、大奥向きでは四代將軍家綱の正室であった高厳院（顯子）や五代將軍綱吉養女であった浄岸院（島津繼豊室・竹姫）の帰依を受けていたことがわかる。そこで、祈祷に関して「徳川実紀」と対照し、整理してみると次のようである。
- ① 九代將軍家重痘瘡の折¹⁸ 祈祷本尊である鬼子母神像を西九大奥へ寄進
 - ② 公方・右大将痘瘡の折¹⁹ 祈祷卷数・洗米を西九大奥へ献上

③ 文化十年（一八一三）、十一代家斉側室お八百懐胎の折、安産の祈祷、祈祷巻数・洗米を西丸へ献上

④ 文化十年十月晦日、十二代家慶第三子竹千代誕生（生母正室喬子）の折、肥立の祈祷、祈祷巻数・洗米を西丸へ献上

⑤ 毎年正月・五月・九月、二月初午祭礼、十月祖師会式、年中甲子、祈祷巻数・洗米・供物を本丸へ献上

記載内容も先例書の形式で幾つかあげられている。そこで判明することは、「両御丸大奥御祈祷所」として、祈祷堂において將軍家の「天下泰平武運御長久繁栄」の祈祷を年中行事の中や將軍宣下御祝儀の折に行なっていたことである。そして、吉例によって祈祷巻数・洗米を本丸・西丸へ献上していたことも両者のつながりの深さを示している。特に、万治二年（一六五九）九月五日本丸へ移り、御台所となつた高厳院は、法養寺に三十番神像や祈祷堂、日蓮像を寄進しており、法養寺の外護者であつたことが窺える。

なお、鬼子母神、大黒天、熊谷稻荷を奉安する祈祷殿では「上様御武運御長久幾久敷御繁昌之懇祈奉勤上節、梵鐘相用、随而寺中之僧侶洪鐘を合図ニ御祈祷殿江出仕致し、御祈祷奉申上候」とあり、山内総出仕にて將軍家の祈祷を行なっていたのである。こうして、法養寺には將軍家や大奥ゆかりの守護神が祀られ、御殿女中の祈願の欲求を充たす要素が整い、その現世利益の祈願を引き受けていたわけである。

法養寺は浅草の寺町に位置するため、江戸市域より離れた池上本門寺の「勸弘所」として、江戸時代を通じて天明八年（一七八八）⁽²⁾・文化十三年（一八一六）⁽²⁾における池上旅立祖師の出開帳や宝暦九年（一七五九）⁽²⁾における比企谷妙本寺（池上本門寺と両山一寺制）祖師の出開帳先寺院となっており、本末関係を通して密着したつながりがあった。また、將軍家とのつながりから御能拝見寺院として機能し、⁽³⁾史料的には元文二年（一七三七）以降江戸城に登城し、

江戸城大奥「祈祷所」の機能と性格（望月）

松之間にて「御目見御礼御能拝見」している。この宣下祝賀能は、江戸城内にて將軍の宣下、代替りの時に能楽師を召して能が催されるもので、大広間前の表舞台で、御三家を始め諸大名が拝観する行事であった。²⁸この由緒ある行事に法養寺も招待されていたわけで、次の史料をみると、

乍恐以書附奉願上候

一 此度

將軍 宣下御祝儀 御能御座候ニ付、拙寺儀者阿御丸大奥御祈祷所ニ御座候ニ付、先年右御祝儀御能拝見被為仰付候、御吉例之通、此度之御能茂拝見被為仰付被下置候様、偏ニ奉願上之通被為仰付被下置候ハ、雖有仕合ニ奉存候、以上

嘉永六年丑十一月二十五日

池上本門寺末

下谷

法養寺 印

寺社

御奉行所

御役人中

とあるように、十三代將軍家定宣下能の折に「阿御丸大奥御祈祷所」ということで、能楽が拝見できるよう寺社奉行

所に願っているものである。これには、先例書があげられているが、『徳川実紀』や『幕府祚胤伝』と対照してあげてみると、次にあげる四つの能楽拝見の例が記されていたことを確認できる。

- ① 元文二年（一七三七）六月、將軍宣下並びに十代家治誕生祝儀の折¹⁷
- ② 天明七年（一七八七）十一月、十一代家斉宣下祝儀の折¹⁸
- ③ 文化十年（一八一三）十一月、十二代家慶第三子誕生祝儀の折¹⁹
- ④ 天保八年（一八三七）十月、十二代家慶宣下祝儀の折²⁰

こうして、歴代將軍の宣下や祝儀の折に能楽が拝見できるということは、江戸に数ある寺院の中でも由緒あることである。すなわち、近世寺院の中でも江戸城大奥の「折祷所」として位置することが、寺院の權威付けの上でメリツトがあつたことを示唆する史料であるといえる。

次の史料からも、法養寺の「折祷所」としての姿勢が窺えるので紹介する。

乍恐以書附御伺奉申上候

一 昨年卯十月中梵鐘有無取調差出可申段被 仰出候ニ付、拙寺儀梵鐘一口有之候故其段御届奉申上候処、今度右梵鐘差上可申旨被 仰渡、奉畏則承知印形仕差上候、然処外二振合承り候得者、末寺又者塔中有之候分者本寺同等之義ニ付、其候御差置ニ茂相成候向ニ承知仕候、右ニ付乍恐奉申上候、拙寺儀者池上本門寺十二代目仏乗院日愷御府内ニおいて説法弘通之地拝領仕度段、東照宮様江奉願上候処、則御聞濟被為在、入国之砌千五百坪余法養寺拝領地ニ御座候、依之本門寺勤弘所と相称、同寺御府内において開帳並説法相勤候節者、拙寺ニおいて相勤候、先格ニ御座候、就而者本山ニおいて茂本寺並寺格取扱茂致し被具候義、殊ニ両御丸御折祷所ニ御

江戸城大奥「折祷所」の機能と性格（望月）

江戸城大奥「祈祷所」の機能と性格（望月）

座席而御由緒茂被為在候御儀、乍恐上様御武運御長久幾久敷御繁昌之懇祈奉勅上節梵鐘相用、隨而寺中之僧侶
洪鐘を合図ニ御祈祷殿江出仕致し御祈祷奉申上候御儀茂有之、塔中式ケ院御座候共、外振合ニ準し何卒本寺格
ニ被仰付被下度、併御請印形奉差上候義ニ御座候得者、違背仕候義ニ者無御座候得者、類例承り及候事故、右
之段乍恐御奉行所江御伺被下度奉願上候、以上

安政三年辰五月十一日

下谷

法養寺 印

承教寺

朗愴寺

この史料の主旨は、法養寺の梵鐘が取調になった折にも、本寺同等であるので問題にならなかつたという内容である。そして、「阿御丸大奥御祈祷所」としての由緒があり、末寺や塔中が二ヶ院ある、本山においても本寺同様の扱いをうけている、家康入国に際し千五百坪を拝領する、よつて本寺同等である、という理由で、安政三年（一八五六）五月十一日に、触頭承教寺・朗愴寺に本寺格扱いを願ひ出ている。勿論、その基調には池上本門寺の「勸弘所」として機能し、將軍家より寺地を拝領されたという由緒も掲げられていたわけである。特に、この史料で注目すべきことは、將軍家の祈願所としてのつながりが強調されていることである。こうした、幕末期に寺格昇格の要求を寺社奉行に提出している動きは、近世寺院の寺格の意義や祈祷所としての特権を知る上で重要なことといえよう。

他にも、天保五年（一八四四）五月九日江戸城本丸が炎上した折に、両者の結びつきがみられるので紹介する。

一筆申あけまいらせ候、扱者、一昨夜御本丸御炎上被遊候御事、誠以乍恐奉驚動候、上々様方御別条も不被為在候哉、是又乍恐奉伺上候、まつ者あらくかしく

長栄様

長順様

(巻)
法やう寺

長佐様

林悦様

火災の翌々日、十一日に法養寺は將軍家の御機嫌伺を行なつていたことが知られる。この長栄他三名の女性の役職について考えてみると、嘉永六年の御使番宛の書状に「林佐 此名前者時々替ル也、此節ハ林佐様也、御文之筆頭ニ而可知事外ニ栄寿様御初是又不相替よろしく御取計御たのミ申まいらせ候」とあり、林佐や栄寿の名前がみえていゝる。この人物の職制は、次に示すように一連の書状にも存在することから、御使番という役職であつたと思われる。そこでこれらの書状を年代順に並べ、内容を「徳川実紀」と対照して整理してみると、次のような御機嫌伺の書状が法養寺より出されていることが確認できる。

- ① 天保十五年(一八四四)五月九日、本丸炎上の折³⁾ 同月十一日、はま岡・おりて・いつ尾宛
- ② 天保十五年十一月十日、十一代家斉正室寔子薨御の折³⁾ 同月十二日、御使番長栄・長順・長佐・林悦宛
- ③ 嘉永元年(一八四八)六月十日、十三代家定正室任子逝去の折³⁾ 同月十二日、御使番長栄・長順・林賀宛
- ④ 嘉永五年(一八五二)五月二十二日暁、西御丸炎上の折³⁾ 翌二十三日、御使番長順・林悦・林賀・長林宛
- ⑤ 嘉永六年(一八五三)七月二十二日、十二代家慶薨御の折³⁾ 同月二十四日、御使番嘉順・林悦・林賀・徳林宛

江戸城大奥「祈祷所」の機能と性格(望月)

⑥ 安政五年（一八五八）八月八日、十三代家定薨御の折、同十一日、御使番榮壽・林佐・林賀・久佐宛とあり、過去の將軍家の弔時や本丸・西丸炎上の折にも御機嫌伺いの書状が出されていることが明らかとなる。①の場合には御使番の長栄他三名宛、そして浜岡宛、おりて宛、いつ尾宛、とそれぞれの御殿女中宛に出されている。また、書状には「よろしく御取計御老女衆様方江被仰上被下候やうねかひ上まいらせ候」と御老女衆（御年寄）に伝達するよう願っているものであった。

以上、江戸城大奥と法養寺の交信について、主に書状を通してみてみたが、一連の史料からは代參を示す具体的な内容は確認できなかった。しかし、書状には御年寄や御使番といった御殿女中の名前がみられ、これらの女性を介して將軍や御台所の祈願が行なわれていたことを検証できた。

三 御殿女中と法養寺のつながり

次に、法養寺と大奥女性とのつながりが、信仰を介したものであったのか否かについて探ってみたい。そこで、信仰的なつながりを示す史料の初見をみると、前述した弘化四年（一八四七）の願書に記されているように、高巖院が寛文年中に寄進した祈祷堂・番神堂祖師像の記載があげられる。後の享保十八年（一七三三）には八代將軍吉宗により鬼子母神像・大黒天像が寄進され、將軍家とのつながりが密接になっていく。同年には、島津家大奥女中のとみ・岡田・藤元・つほねの四名が、薩摩藩島津継豊正室竹姫の祈祷を法養寺に依頼するため、戸帳・水引を寄付している。この竹姫は、享保十四年（一七二九）に島津家に輿入れをしているが、後に五代將軍綱吉の養女となっており、江戸城大奥と縁が深い女性であった。また、次の史料をみると、

一 釈迦涅槃像 老幅

右者寛文三年天真院様御寄附被遊候、絹地惣縫地像二御座候、釈尊之羅髮者、則天真院様以 御前髮被為縫候由、申伝候

とあり、法養寺に所藏される釈迦刺繡涅槃画像は、寛文三年（一六六〇）紀州藩祖徳川頼宣の子光貞の室天真院（照子）⁽⁴⁾が寄進したものと伝えられている。なお、この画像の裏書にある修理銘には、

御涅槃像依年々旧破壊 今般更奉修治之者也

表具施主 薩州御奥二而 おとわ女性

世話人 同 奥二而 おゆき女性

後見清見

同人母 妙行尼

第十三世 英雲院日懺（花押）

寛政八丙辰年二月

とあるように、百三十六年後の寛政八年（一七九六）に薩摩の島津家のおとわ・おゆきといった奥向き女性によって修理されていることが判明する。すなわち、將軍家はもとより、竹姫の關係から薩摩島津家大奥との信仰的なつながりが、礼拝の対象となる釈尊涅槃図修復寄進という点にみられたわけである。

次に、安政二年（一八五五）に法養寺十七世日盈が記した一年間の將軍家・大奥への献上品目から両者の關係をみてみると、表2のようになる。これを見ると正月から十二月まで法養寺の年中行事の折に、毎月の如く献上物があげ

江戸城大奥「折袴所」の機能と性格（望月）

江戸城大奥「祈禱所」の機能と性格（望月）

表2 年間献上品一覽

| 月 日 | 本 丸 | 御 伽 衆 | 御 使 番 |
|----------|---------------------|------------|-------|
| 正月四日 | 卷数・洗米・橘煎餅 祝儀金・扇子 | 洗米・干塩 | 洗米・干塩 |
| 二月初午日翌日 | 洗米・熊谷稻荷御札 | 洗米・熊谷稻荷御札 | 洗米 |
| 六度目甲子日翌日 | 洗米 | 洗米 | 洗米 |
| 五月四日 | 卷数・洗米・橘煎餅 祝儀金・扇子 | 洗米 | 洗米 |
| 九月四日 | 卷数・洗米・橘煎餅 祝儀金・扇子 | 洗米 | 洗米 |
| 九月二十三日 | 洗米・熊谷稻荷御札 | 洗米・熊谷稻荷御札 | 洗米 |
| 十月八日 | 盛物・披露文 | 盛物 | 盛物 |
| 十二月十六日歳暮 | 洗米・祝儀金 | 洗米・納豆・金五十疋 | 洗米・納豆 |

られており、公方・右大将・御台所・御廉中、御伽衆、御使番、とそれぞれの職制の女性による献上品があったことが知られる。因みに、正月四日の本丸献上目録雛形には「御卷数 台附、御洗米 台附、御折 足附、ひしお曲物、風呂敷包、黒塗箱 沓、御文箱 沓、片木 何枚」とあげられている。特に、法養寺九世日廣の木版刷曼荼羅本尊（熊谷安左衛門開眼）が巻数箱に添えられているのは、法養寺に勧請される稻荷の信仰面を考える上で特筆すべきことといえる。つまり、法養寺の享保二十年（一七三五）二月十日に作成された「熊谷稻荷縁起」をみると、高蔵院と年寄戸沢といった大奥女性の取り持ちによって祀られたことが宣伝されているのである。

年間を通じての献上品の特徴は、正月が本丸に「吉例之通年頭為御祝儀金五十疋扇子拾対進上之仕候、幾久敷御受納可被下候」と御祝儀金と扇子があげられ、五月、九月も正五九の祈願ということで同様であった。お会式には、公方方に「日蓮大菩薩御供物」と書かれた御盛物が、御伽衆に御盛物として「会式御供物」と書かれた餅十一包が、御使番衆に「会式御供物」十八包が、それぞれ個人別に渡されている。この献上品は「吉例之通、歳暮為御祝儀金五十疋納豆拾曲進上之仕候間、幾久敷御受納可被下候、此段從拙僧共宜可得貴意旨法養寺被申付、如此御座候」とあり、法養寺が「進物御改御番所御当番衆中」宛に提出している。そして、歳暮の折には「十二月十八日頃与同二十三日当り迄之内、御本丸与御使參ル其節求肥鮎一折上ル、依之前々与求肥鮎之用意いたし可置事」とあり、求肥鮎一折が本丸よりの使者に渡されていたことが明らかになる。⁽⁴⁾

これらの献上品の性格をみると、正・五・九月には洗米、特に正月太歳には祈禱洗米・干塩を、二月初午日には三社宮稻荷大明神の祈禱洗米・御札、甲子には大古久天の祈禱洗米、歳暮には祈禱洗米・納豆十八曲を御使番十八人それぞれに渡されていた。加えて、熊谷稻荷や大黒天といった守護神の祈禱の御経があがった祈禱洗米が献上されており、献上品は祈禱色が濃かったといえるのである。

これらのものを御殿女中はどうしていたのであろうか。歳暮の場合の御伽衆への披露文をみると「当月御祈禱の御洗米しん上仕りまいらせ候、御信心御頂き遊ハし候やう存上まいらせ候、なを暮の御祝儀申上たく、手製の壺曲ツツ御覧に入まいらせ候」とあり、法養寺側は御殿女中に「信心」によっていただくよう布教していることから、信仰を介したやりとりが窺えるのである。これらの書状は、「以手紙啓上仕候、然者例年之通、今日御本丸大奥江歳暮御祝儀申上候間、御添書奉願上候、依之如此御座候」とあり、歳暮の際に「月番御留守居」の役人に添書が提出されて

おり、これは初午の際も同様であった。すなわち、法養寺と大奥のつながりは、書状のやりとりからみると、法養寺↓月番役所↓御使番↓御伽衆↓御老女（御年寄）↓御台所といったルートで披露文や献上品があげられていたことになる。ここで注目されることは、御台所や御伽衆のみならず御使番衆にまで、正月は「太歳三箇日 奉欽誦陀羅尼品一千巻」、五月・九月は葵紋付箱に入れられ「三社宮稻荷大明神 奉欽誦陀羅尼品一千巻」と書かれた祈禱洗米、昆布・干塩が渡され、祈禱の御経があがった洗米と御札を渡している点である。御使番は、代参のために城外に出て、御台所に代わって寺社に参詣する役目を果たしていたが、この職制の人々にまで祈禱札を配っていることをみると、大奥内でも個人祈願が行なわれていたことを推測させるのである。

また、年中行事の他にもつながりがみられるので、次の史料を紹介してみたい。

なおく〜幾久しく万々年もとめて度かしく（目出）

一筆申しあげまいらせ候、まつく〜上々様方御機嫌よく成らせ給、恐悦御目出度難有かりまいらせ候、扱ハ日光御参詣二付、御祈禱修行仕り、公方様御祈禱精誠二御祈念申上奉り、御巻数御洗米御めて度献（目出）上仕りまいらせ候、よろしく御取計遊ハし被下候やう、願上まいらせ候猶幾万々年も御武運御長久御はん昌（祝）の御事のミ能々御祈念申上奉り候、誠ニ幾久しく、万々年も御めて度さのミ相かハらすと、い（祝）わい上まいらせ候。（目出）

めて度かしく

長栄様

長順様

長佐様

林悦様

人々御申上

天保十四年（一八四三）四月十三日、將軍が日光へ參詣する折に「日光御參詣無御滞還」の祈禱を行なう旨の書状を、御使番の長栄・長順・長佐・林悦宛に出している。なおこれは「公方様日光御參詣二付、別段被仰付者無之候得共、於御宝前御祈禱申上、四月十一日巻數御洗米献上、巻數御洗米者正五九之通」とあることから、事前に祈禱を行ない、大典に献上していたのである。他にも書状があるので「徳川実紀」と対照して整理すると、次のようにまとめられる。

- ① 天保十四年（一八四三）四月二十一日、十二代家慶が日光御參詣無事済ませた折、翌二十二日、「御機嫌よく御長久御繁昌」の祈禱、御使番長栄・長順・長佐・林悦宛
- ② 弘化二年（一八四五）二月二十八日本丸普請出来、十二代家慶が本丸へ移る折、翌二十九日に將軍の「御武運御長久御繁昌」の祈禱、御使番長栄・長順・長佐・林悦宛
- ③ 嘉永五年（一八五二）十二月二十一日、西丸を普請し、十三代家定が移る折、翌二十二日「御武運御長久御繁昌」の祈禱、御使番嘉順・林悦・林賀・徳林が依頼
- ④ 嘉永六年（一八五三）九月二十三日、十二代家慶が御移御代替の折、同日「御長久御繁昌」の祈禱、御使番嘉順・林悦・林賀・久左宛
- ⑤ 嘉永六年九月二十三日、十三代家定が御移御代替の折、「御長久御繁昌」の祈禱、御使番栄寿・林佐・栄佐・林賀・久左が依頼

⑥ 嘉永六年十一月二十三日、十三代家定が宣下即日御大札相済に付、翌二十四日、「ますく御機嫌よく御長久御繁昌」の御祈禱、御使番の栄寿・林佐・栄佐・林賀・久佐宛

⑦ 嘉永六年十一月二十三日、十三代家定が宣下即日御大札相済に付、翌日「御機嫌よく御長久御繁昌」の祈禱、御使番栄寿・林左・栄左・林可・久佐が依頼

みられるように、大奥「祈願所」として、法養寺は將軍の日光參詣や將軍宣下御大札・御移御代替の折に祈禱を行っていた。これは、⑤は④をうけて、⑦は⑥をうけてと、祈願の書状の形態は、將軍家の祈禱を法養寺が御殿女中の御使番に伺い、御年寄はそれをうけて法養寺に將軍家の「武運長久・繁昌」の祈禱を依頼するというものであった。

こうして法養寺は「江戸城両御丸祈禱所」・「將軍家御能拝見寺院」として君臨し、江戸に数ある寺院の中でも祈禱所としての機能や將軍家・大奥といった密接な結びつきが確認できたのである。

まとめ

以上のことから、天正年間に池上本門寺の「勸弘所」として創立された法養寺は、寛文年間に高巖院・浄岸院といった大奥女性の帰依により信仰を介した結びつきが始まった。以降江戸時代を通じて、將軍家・大奥の祈願を行っていたわけである。江戸城大奥（本丸・西丸）両所の「祈禱所」として機能することになったのは、史料的には幕末期であった。そこで法養寺と江戸城大奥のつながりをまとめると、次のようになる。

① 將軍家の慶時に江戸城に登城し、能楽拝見を行なう。

②將軍葬御・江戸城炎上の折に、將軍の御機嫌伺いの書状を御殿女中が出す。

③將軍宣下・若君誕生・將軍御移御代替の折に、武運長久・繁昌の祈禱を法養寺が行なう。

④法養寺の年中行事において將軍家の祈願を行ない、祈禱巻数・洗米を大奥に献上する。

他にも、將軍ゆかりの仏像や靈寶が勧請され、「祈禱所」として周囲にはばかることなく参詣できるといったことが、御殿女中の祈願や代参を誘う要因となった。特に諸社社への代参は、御台所に代わり御年寄や御使番が実質的な役目を担ったわけである。このつながりについて、大奥への献上品をみてもわかるように、御台所への献上のみならず、御伽衆や御使番一人一人に至るまで供物が配られていた。このことは、江戸城大奥女性と法養寺の關係の深さを示しているといえよう。また、信仰を介してのつながりの特徴は、將軍家ゆかりの鬼子母神や大黒天、そして熊谷稲荷といった守護神が勧請される法養寺に御殿女中が祈願を依頼し、將軍家に関する祈禱が祈禱殿で厳修されるということであった。この一連のことからしても祈禱色が濃かったといえるのであり、そこでは千卷陀羅尼といった加持祈禱が盛んに行なわれていたのである。

こうした江戸城大奥「祈禱所」は、江戸幕府が正式に認可するところではなかったが、將軍家とつながりがあるといった名督から、由緒書や届書といった史料に宣伝材料としてその名称が登場してくる。寺院側としては、將軍や大奥の祈禱を引き受ける由緒ある寺院として、周辺に住む人々に認知してもらうため、積極的に大奥との結びつきを図ったのであろう。これは幕末に至って、江戸城内の年中行事の折に、献上品を大奥から法養寺に届けていることから窺える。さらには、一般寺院との区別を図り、本寺格の扱いをうけるために力を注いだことも「祈禱所」の意義や性格を考える上で重要なことといえよう。

この江戸城大奥「祈祷所」は、先述した通り日蓮宗においても数ヶ寺存在するが、今後は個別の事例を深く検討することにより、「祈祷所」の全体像を明確にしていきたい。

註

- (1) 圭室文雄「葬祭から祈祷へ」（日本宗教史研究会編「布教者と民衆との対話」所収）
- (2) 江戸時代における祈祷寺院の成立に関しては、各宗派において特徴がみられる。日蓮宗の場合には、修法祈祷（加持祈祷）や守護神・流行神との関係から検討しなければならないと考える。
- (3) 身延山久遠寺の祖師が、江戸深川浄心寺において出開帳を行なった折に、御殿女中が代参している（拙稿「江戸城大奥女性の法華信仰―身延山久遠寺の江戸出開帳を中心に―」、「大崎学報」一四六号 所収）。
- (4) 御殿女中とは、三田村鳶魚氏の「御殿女中」によれば、柳營や諸侯の奥向きに使える女性の総称と定義している。ここでは將軍の居住する江戸城本丸と大御所（隠居した前將軍）や大納言（將軍の世子）が居住する西丸とあり、両所に仕える奥女中を指すことにする。また、本稿で江戸城大奥女性として使用するのは、御台所と御殿女中すべてを含めた名称である。
- (5) 三田村鳶魚前掲書、二六五頁
- (6) 祈祷所の名称は、「祈祷所」・「御祈祷所」と史料に出てくるが、「御」は敬称であり、両者は同じ意味であると解釈した。そこで、本稿では「祈祷所」に統一した。
- (7) 法養寺と御殿女中の信仰のつながりに関しては、拙稿「江戸城大奥女中の稻荷信仰―江戸下谷法養寺の熊谷稻荷を中心に―」（「大崎学報」第一五〇号 所収）において、既に論究したので参照されたい。
- (8) 日蓮宗とは、現在の宗教法人日蓮宗のみを指すのではなく、日蓮の教えを信仰する教団全体を指すことにする。
- (9) 江戸幕府は、元禄元年（一六八八）四月に寛永八年（一六三一）までの創立は古跡、九年以降は新地と区別し、寺院数の制限を強化し、元禄五年（一六九二）五月以降寺院を建立することを禁止した（「徳川禁令考」前集第五 所収）。
- (10) これらの寺院は「日蓮宗寺院大鑑」より抜粋した。
- (11) 坂本氏前掲論文

- (12) 「中山法華經寺誌」二〇四頁
- (13) 高柳金芳前掲書八二―九〇頁
- (14) 中山智泉院・日暮里延命院、そして天保四年(一八三三)に將軍家菩提寺としてお取り立てになった鼠山感応寺と御殿女中のかわりに関して、高柳前掲書を始め一般書には僧侶と御殿女中の艶色事件として報告されているが、信仰的な面については見直す必要があると思われる。
- (15) 「武江年表」天明八年(一七八八)四月十五日の頁(東洋文庫本)
- (16) 「日蓮宗寺院大鑑」・「御府内寺社備考」等によると、法養寺は天正十五年(一五八七)妙経院日等によって神田三河町に創立され、慶長年間に下谷稲荷町に移転、そして明治四十三年(一九一〇)に池上にあつた妙教庵と合併して本門寺の近隣に移転し、現在に至つてゐるとある。
- (17) 大田区池上、法養寺所蔵文書(大田区史)資料編・寺社1 所収)。以下本稿で特に註記しない限り、同寺文書とする。
- (18) 「幕府祚胤伝」五(国書刊行会編「柳宮婦女伝叢全」所収)。以下「祚胤」と略記。
- (19) 「祚胤」五
- (20) 「祚胤」七
- (21) 「祚胤」八
- (22) 「武江年表」天明八年(一七八八)四月十五日の頁
- (23) 右書、文化十三年(一八一六)四月二十八日の頁
- (24) 右書、宝暦九年(一七五九)四月八日の頁
- (25) 池上本門寺でも、將軍御代替御祝儀の折に御白書院において、御能拝見を行なつてゐる(高輪承教寺文書、「大田区史」資料編・寺社1 所収)。
- (26) 將軍宣下能に關しては、『岩波講座能・狂言』1に詳しい。
- (27) 「祚胤」六。『徳川実紀』(国史体系本)
- (28) 「祚胤」七。『統徳川実紀』(以下「統実紀」と略称)第一篇二九頁には、家斉の將軍宣下が天明七年(一七八七)四月十五日とある。
- (29) 「祚胤」八。『統実紀』第一篇には、竹千代誕生が同年十一月十八日とある。

江戸城大奥「祈祷所」の機能と性格(望月)

- (30) 「祚胤」八。「統実紀」第二篇三三九頁には、家慶の將軍宣下が九月十三日とある。
- (31) 「統実紀」第二篇五二〇頁には天保十五年(改元弘化元年)五月十日出火とある。
- (32) 「祚胤」七。「統実紀」第二篇五二八頁
- (33) 「統実紀」第二篇六〇八頁
- (34) 「統実紀」第二篇六九〇頁
- (35) 「祚胤」八。「統実紀」第三篇二頁
- (36) 「統実紀」第三篇五二五頁
- (37) 身延山久遠寺も江戸城災上の折に、御見舞の書状を大奥宛に發給している(文久三年(一九六三)六月三日「西御丸御炎上御見舞之覚」他、山梨県身延山久遠寺「身延文庫」所蔵文書)。
- (38) 「御府内寺社備考」六、法華宗
- (39) 「徳川諸家系譜」第一
- (40) 天真院は池上本門寺の御靈屋にも祀られている(「砂子の残月」、「江戸叢書」所収)。
- (41) 註(7)と同
- (42) 池上本門寺でも「御代替得意之案目録一(大田区史)資料編寺社」所収)によると、九代將軍家重から十二代家慶までの御代替御祝儀の献上品が掲載されている。この本門寺と法養寺、それぞれの太奥とのつながりについては今後比較検討してみたい。
- (43) 旧東京帝国大学編「旧事踏問録」によれば、御殿女中の中で將軍付き御使番は十三人となっている。三田村蔦魚「御殿女中の研究」にも、弘化三年(一八四六)家慶代の本丸の御使番は十一人、同格三人、西丸は十人、御殿中様は二人となっているが、この員数と個人の信仰のつながりに関しては検討を要する。
- (44) 「統実紀」第二篇四八九頁
- (45) 「統実紀」第二篇五三七頁
- (46) 「統実紀」第二篇七〇〇頁
- (47) 「統実紀」第三篇三五頁
- (48) 右同

(49) 『統実紀』第三篇六八頁

(50) 右同

江戸城大奥「祈祷所」の機能と性格(望月)